

軍務と知性：21世紀のミリタリー・プロフェッション ーペトレイアスを事例としてー

野並 飛高

本文は、3等海佐 野並 飛高が第66期海上自衛隊幹部学校指揮幕僚課程の特別研究で執筆し、最優秀論文として英国海軍から第1海軍卿賞を受賞したものである。

今回の受賞は、イラクでのペトレイアスの対反乱作戦(COIN)を分析した研究において、戦略目標の達成と軍人に求められる知性の関係に踏み込んだ論旨が評価された。



英国第1海軍卿賞授賞式(令和元年5月31日、英国大使館においてグウィン・ジェンキンス海軍参謀長補より授与)

(英国第1海軍卿賞：平成25年12月に英国第1海軍卿兼海軍参謀長のジョージ・ザンベラス海軍大将(当時)が本校を訪問された際、「海上自衛隊と英海軍の友好の証として、海上自衛隊幹部学校において執筆された優秀な論文に対して賞を授与したい」との提案により設立され、今回で5回目となる。)

はじめに

冷戦後、軍隊をとりまく環境は大きく変化したが、いま軍隊に求められる役割とは何だろうか。国家間戦争の生起がほぼなくなり、民族問題や思想、宗教等をめぐる内戦や紛争は増加の一途をたどっている。それに伴い、一国の軍隊はより小規模な用途、非正規戦争や非軍事的任務に使われるこ

とが多くなっている。同時に世界的傾向として、その任務や組織形態、軍人の教育にも変化が求められており、とりわけ先進民主主義国は、冷戦期に構築した軍事力の性格を大幅に変化させている¹。国家間戦争のために編成され、装備を整え、ドクトリンを制定してきた軍隊は、それらが役に立たない新たな任務を与えられることが多くなり、果たすべき役割を模索している。

また、軍隊の本分である戦争をめぐる環境自体も変化している。軍隊の任務は多様化するとともに、情報革命等によって戦略・作戦・戦術の並列化が進み、軍務の敏感性は大きく増した。こうした変化のなかで、軍隊及び軍人のあり方に関する議論は活発化している。中には「技術官僚に過ぎず、政治に関する知見に乏しい軍人への全面的な委任は政治目的達成に悪影響を与える」とし、「戦術レベルやそれ以下の区々たる戦闘であっても文民は積極的に介入すべき」との主張もある²。

このような結論は正しいのだろうか。たしかに、戦争の階層構造が並列化し、軍事の微細な出来事が政治に大きな影響を与えるようになった情勢において、個々の戦術的判断の重みは増していよう。だが、文民が戦術レベルまで統制することが重要という主張は、軍人が国内世論や国益に関する政治的な見識をもたず、政策のプロたる文民が戦術的判断に介入したほうが良い結果が得られるという前提に基づいている³。しかし、今日の通信技術の発達をもってしても、あらゆる戦術局面において遠距離から文民が状況を的確に判断して迅速に決断を下し、それを齟齬なく現場指揮官に伝達することは極めて難しい⁴。またそのような状況で責任者たる文民に全ての判断を丸投げしてしまうのは、楽な選択ではあろうが、軍人のプロフェッショナルリズムの何たるかを問われることになる。

では逆に、軍人側にそのような見識があればどうか。現場の指揮官が、今自分のおかれている状況の政治・経済・社会的背景について平素から理解を深めていれば、予測を超えた事態であっても、本質的な行動規範や判

¹ 八木直人「2012年；米国の軍事クーデタは生起するか？—ダンラップの仮説とポストモダン・ミリタリー—」『海幹校戦略研究』第1巻第2号、2011年12月、30頁。

² 部谷直亮「新時代の政軍関係」川上高司編『「新しい戦争」とは何か—方法と戦略—』ミネルヴァ書房、2016年、80頁。

³ 同上。

⁴ 例えば任務行動中の潜水艦では、行動の秘匿の観点から通信の使用が制約されるため、個艦の艦長の判断が極めて重視される。これは、通信技術の発達に関わらず生起し得る問題である。

断基準を失うことなく、迷わず行動することができるのではないか。すなわち、軍人が戦術レベルの判断に資するだけの純軍事的な知識にとどまらず、上位のレベルに関する幅広い知見を持ち、自らの直面する戦術的局面が果たし得る役割を認識していれば、より政策や戦略に寄与しうる判断ができるのではないだろうか。

近年、イラクで注目を集めたペトレイアス (David. H. Petraeus) は、力でゲリラを叩き潰すのではなく、民生を重視して劇的な治安の回復に成功し、その職責を全うした。その手法の骨子は「対ゲリラ戦においては、純粋に軍事的な解決は存在しない。最終的には政治的な決着を目指すべき」というものである。このような思考は、「政治に関する知見に乏しい」軍人から導出されるものではない。したがって彼の成功例は、今日の軍人のプロフェッションの在り方について、一つの方向性を示す端緒となる可能性がある。

本稿では、ペトレイアスの事例からその思考過程と、成功に至るバックグラウンドを分析することによって、今日の多様化する軍務の中で、軍人が備えるべき職業的専門性を追求する⁵。第1節では、現代の軍をめぐる環境の変化を整理し、どのような背景と文脈から、冷戦期とは異なる軍隊と軍人のあり方が問われているのかを明らかにする。第2節では、ペトレイアスの事例分析から、彼の手法とその成功が米軍に与えた影響について明らかにする。第3節では、その成功の要因を分析することで、現代の軍人に求められる職業的専門性を明らかにしていく。

1 混迷する軍隊

(1) 誰が為にラッパは鳴るか

ハンチントン (Samuel P. Huntington) の『軍人と国家』は、政軍関係研究の出発点とされる。ハンチントンは軍の実効性と権力の抑制とを両立する手段として「客体的シビリアン・コントロール」を提唱した。軍に自律的な職業的専門性を持たせて政治的に中立な立場に置くことで、軍人の権力を縮小して政府への自発的な統制に服させ、暴走の危険を極小化し、安定した「暴力の管理」を可能にするというものである⁶。

⁵ なお本稿で扱う「軍人」とは、ハンチントンの『軍人と国家』と同様、指揮権を持つ士官又は将校 (officer) を対象としている。

⁶ サミュエル・ハンチントン『軍人と国家 上』市川良一訳、原書房、2008年、83-84頁。

またハンチントンは、「軍隊の任務は戦闘である」と明言している。彼は冷戦後の軍隊が非軍事的任務への対応に迫られ、その役割が変質しつつあることを危惧し、「軍隊は基本的に非人道的なものであり、その目的は最も効率的な方法で人を殺すことである」とし、「軍隊の目的は戦闘、すなわち敵を阻止し打倒することである。軍隊はその目的のためだけに徴募し、編成され、訓練され、装備を整えるべき」だと説いた⁷。軍隊が非軍事的任務を伝統的に行ってきたことを認めつつも、あくまでそれは副次的なものであり、主任務たる戦闘への備えを疎かにして能力を低下させてはならない、としている⁸。

さらに、スミス (Rupert Smith) は「国家間戦争から人間(じんかん)戦争へとパラダイム・シフトが起きた」という⁹。彼は国連軍司令官等を務めた経験から、イラク戦争では戦後の望ましい成果についての分析が不十分であったため、フセイン政権の迅速な打倒には成功したが、その後の体制構築に失敗したと指摘する¹⁰。そのうえで、非国家主体同士の戦闘が多い現代において軍事力が確たる効用を発揮するには、背景となる経済・外交・政治・人道的な要因等に対する理解が必要であると説く¹¹。軍事指揮官は、自らの作戦行動がどう位置づけられるのか理解する必要があり、さもないと、軍事力によって最終目的たる政治的成果を達成することはできない、という主張である。

このように、現代の軍隊は環境の変化にさらされており、その存在意義と役割についての議論はますます活発となっている。たしかに「暴力の管理」は軍人の職業的専門性の依って立つ基盤であり、戦闘は軍隊の本分である。なぜならば、それは民間ではよく為し得ない分野であり、だからこそ国家は暴力を効率よくコントロールするために「国家の軍隊」を所有してきたのである。しかしながら、国家間戦争の頻度は減少し、軍隊は対テロ戦争や安定化作戦、非軍事的任務に使用されることが増えつつある。現代の軍隊に求められる任務は多様化の一途をたどっており、軍隊はその果たすべき役割を模索しているのである。

⁷ Samuel P. Huntington, "New Contingencies, Old Roles," *Joint Force Quarterly*, No. 2, Autumn 1993, p. 43.

⁸ Ibid.

⁹ ルバート・スミス『軍事力の効用 新時代「戦争論」』佐藤友紀訳、原書房、2014年、23頁。

¹⁰ 同上、547-552頁。

¹¹ 同上、553-560頁。

(2) 軍務の多様化と感性の増大

一方、戦争とそれをとりまく戦略環境はどのような状況にあるのだろうか。クラウゼヴィッツが「戦争は他の手段をもってする政治の継続」と定義したように¹²、戦争は政治的意図を目的とした手段であり、一般的な戦争の階層概念は、戦略・作戦・戦術の垂直関係であると理解されてきた。そのなかで、戦術行動の成果を戦略上の目標に寄与させるための方法論はなかなか確立されなかったが、1980年代の米陸軍を中心に行われた「作戦術」の確立と「作戦次元」の設定によって、軍人は所管する軍事力を適正に使用する方法論を獲得し、自らの職業的専門性をより高めることとなった¹³。

作戦術とは、米国統合軍の定義によれば「目的(Ends)、方法(Ways)、手段(Means)の統合によって、戦略、戦役、そして作戦の策定及び軍事力を編成し運用するための、指揮官と参謀の技術、知識、経験、そして創造性による認知的アプローチ」である¹⁴。この作戦術に米軍が注目した背景には、ベトナム戦争における失敗がある。同戦争において米軍はほぼ全ての戦闘に勝利したが、戦争そのものには敗北した。装備と火力の優勢によって戦術的勝利を積み重ねることには成功したが、戦略と戦術とを繋ぐ方法論に欠けていたため、その成果を戦略目標の達成に寄与させることができなかったのである。この反省をもとに、米軍は作戦術の研究と教育制度化という組織改革を推進し、それは1991年の湾岸戦争で勝利として結実した¹⁵。

しかし近年、この戦争の階層概念に変化が表れている。20世紀後半からの技術の急速な発展は、戦争の階層構造を圧縮するとともに、政治指導者による軍隊の使用の増加と、中小隊レベルの指揮官が担当するような小戦闘への直接介入を促進した¹⁶。また、ポスト産業社会において少子化が進んだ結果、戦争での犠牲を許容しない傾向が先進民主主義国家を中心に強

¹² クラウゼヴィッツ『戦争論 レクラム版』日本クラウゼヴィッツ協会訳、芙蓉書房出版、2001年、44頁。

¹³ 齋藤大介「戦争を見る第三の視点—『作戦術』と『戦争の作戦次元』—」『戦略研究』第12号、2013年1月、93頁。

¹⁴ U. S. Joint Chiefs of Staff, *JP3-0: Joint Operations*, Department of Defense, 2017, p. xii.

¹⁵ 北川敬三「安全保障研究としての『作戦術』—その意義と必要性—」『国際安全保障』第44巻第4号、2017年3月、101頁。

¹⁶ Jan Angstrom & J. J. Widen, *Contemporary Military Theory: the Dynamics of War*, Routledge, 2015, p. 169.

まり、人命の重みと政治的影響は著しく増した¹⁷。さらに、情報通信技術の発展によって、そのような戦闘で命を落とした兵士の死は大きく報道されるようになり、世論の感性をもたらしした¹⁸。すなわち、一兵士や民間人の死といった戦術レベルの出来事が、直接戦略・政治レベルにまで影響を及ぼすようになってきたのである。軍隊の任務は多様化するとともに、その感性をも大きく増しているといえる。

(3) 問われるミリタリー・プロフェッション

このような情勢から、部谷は「ある種の技術官僚に過ぎない軍人が政治における独自の手法、つまり国内世論や総合的な国益に関する見識をもたない以上、戦術レベルですら政治的な影響を与える現代の戦略環境において、彼らに全面的に委任することは政治目的達成に結びつかず、悪影響を与えるのは間違いない」とし、「いかなる局面でも文民の軍事面への介入は許容される」ため、「戦術レベルやそれ以下の区々たる戦闘であっても積極的に介入すべき」と結論づけている¹⁹。またコーエン (Eliot A. Cohen) は、米軍のソマリア介入の失敗は文民が戦術レベルまでチェックを怠ったことに起因する、と指摘する²⁰。これらは戦争が政治の延長である以上、最終的な責任者である政治家が細かな戦術レベルまで直接コントロールすることが望ましい、という「主体的シビリアン・コントロール」の復権ともいべき主張である。そこでは、繊細さを増す実務にあたる軍人の能力の限界について、ある種の諦観が見て取れる。

一方でグヴォデス (Nikolas K. Gvosdev) は、軍人が政策プロセスを理解することで、より文民に現実的な選択肢の提供が可能になるとし、国家安全保障のもと多様な任務を背負っている軍隊にとって「暴力の管理」はあまりにも狭すぎる役割だ、と指摘する²¹。またエチェバルリア (Antulio J. Echevarria) は、戦闘の勝利を戦略的な成果に結びつける複雑なプロセスについて考えることを避けてはならず、指導者は戦闘よりも上位の戦略や

¹⁷ エドワード・ルトワック「Post-Heroic Warfare (犠牲者なき戦争) とその意味」『平成11年度安全保障国際シンポジウム報告書』防衛研究所、2000年3月、48-49頁。

¹⁸ James Adams, *The Next World War: Computers Are the Weapon and the Front Line Is Everywhere*, Simon & Schuster, 1998, pp. 278-290.

¹⁹ 部谷、80頁。

²⁰ Eliot A. Cohen, *Supreme Command: Soldiers, Statesman, and Leadership in Wartime*, the Free Press, 2002, pp. 201-202.

²¹ Nikolas K. Gvosdev, "Should Military Officers Study Policy Analysis?" *Joint Force Quarterly*, No. 76, 1stQuarter, 2015. pp. 32-33.

政略について考える習慣を身に付けなければならない、と説く²²。これらは前述のスミスのような、軍人が目標を達成するためには、政治・経済・社会に関する幅広い理解が必要であるという主張に通じるものである。

上記のように現代の軍隊をとりまく環境は変化し、任務は多様化するとともにその感性は大きく増した。軍隊は新たな役割を模索しており、そのあり方に関しても、政治的知見のない軍人に細部の判断を委ねるのは好ましくない、という主張がある一方で、だからこそ軍人がもっと幅広い知識を身に付けるべきだ、と説く者もいる。こうした議論のなか、近年注目を集めた軍人として、米元陸軍大将ペトレイアスがいる。彼は力でゲリラを叩き潰そうとするのではなく、民生重視の Counterinsurgency (対反乱作戦、以下 COIN) によって成功を収め、一躍英雄となった。2003年に始まったイラク戦争は戦後処理が難航し、米兵の犠牲は増える一方であったが、彼が着任し COIN を主導して以降、治安は急速に回復した。一時は米軍の敗北が真実味を持って語られた戦争が、終結宣言にまでこぎつけたのだ²³。この事例は識見に富む軍人が作戦を成功させ、政策の達成へと導き得た一例である可能性があり、現代軍人の職業的専門性を考察する上で意義深い分析対象である。彼はどのような知識と問題意識をもって、軍隊の果たすべき役割を認識し、いかなる手法をもって成功を収め得たのだろうか。

2 現れた英雄

(1) 敗北寸前だったイラク戦争

2007年2月、ペトレイアスはイラク多国籍軍司令官に就任し、本格的な COIN 作戦であるサージ (Surge) 戦略の指揮をとることとなった。治安情勢は悪化の一途をたどっており、前年2月に北部のサマラで発生したアスカリ廟爆破事件以降、宗派間抗争が激化してほぼ内戦状態に陥っていた。本国ではイラク戦略の修正が盛んに論じられるようになり、中間選挙でも

²² Antulio J. Echevarria II, *Toward an American Way of War*, U.S. Army War College, March 2004, pp. 17-18.

²³ 吉岡猛「イラク戦争における戦後処理戦略—『サージ戦略』への転換とその背景分析—」『海幹校戦略研究』第3巻第1号、2013年5月、79頁。

早期撤退を訴える民主党が勝利したため、ブッシュ政権は何らかの新たな戦略を早急に打ち出す必要に迫られていた²⁴。

それまで米軍が採用していた NSVI (National Strategy for Victory in Iraq) 戦略では、「掃討、確保、構築 (Clear, Hold, Build)」、すなわち敵勢力の掃討、掃討した地域の確保、確保した地域への経済基盤等の構築を目標としていた²⁵。しかし、実際には反乱勢力を掃討しても、米軍が基地に帰還するたびに戻って来ては協力した住民らを殺害して治安が悪化し、再度掃討を要するというもぐら叩きの如き様相を呈していた²⁶。この原因は、①戦後処理のための兵力が過少で適切な能力も有していなかったこと、②適切な戦後処理計画が作成・配布されていないこと、③国防省と国務省の相互協力不足、④事前見積もりの甘さ、に集約することができる²⁷。

とりわけ、軍隊の戦後処理における役割は軽視されていた。政府は戦後処理のための兵力の増派を認めず、また米軍も大多数が増派に否定的な見解を示していた²⁸。ここには「軍隊の仕事は戦闘であり、復興を中心とした戦後処理は自分の仕事ではない」という認識が垣間見える²⁹。だが、戦後処理を担うべきイラク軍と警察が消滅してしまい、しかるべき国内組織によって治安が維持できない状況では、派遣軍の他にその役割を担える存在はなかった。このように当時の米軍は、戦後処理における自らの役割の重要性に対する認識と準備が不十分であり、必然的にその実効は上がっていなかった。

この背景には、米軍が「米国流の戦争方法」を重視し、COIN を軽視してきたという事情がある。ベトナム戦争で COIN に苦手意識を植え付けられた米軍は、圧倒的兵力と先進的な装備によって敵をシステムティックに破壊、撤収するという戦争の手法を追求し、その傾向は湾岸戦争での鮮烈

²⁴ 福田毅「米国流の戦争方法と対反乱 (COIN) 作戦—イラク戦争後の米陸軍ドクトリンをめぐる論争とその背景—」『レファレンス』第 59 巻第 11 号、2009 年 11 月、94 頁。

²⁵ National Security Council, *National Strategy for Victory in Iraq*, White House, November 2005, p. 18.

²⁶ Michael E. O' Hanlon & Kenneth M. Pollack, "A War We Just Might Win," *The New York Times*, July 30, 2007.

²⁷ 吉岡、87-94 頁。

²⁸ Peter D. Feaver, "The Right to be Right: Civil-Military Relations and the Iraq Surge Decision," *International Security*, Vol. 35, No. 4, 2011, pp. 107-108.

²⁹ David C. Hendrickson & Robert W. Tucker, "Revisions in Need of Revising: What Went Wrong in the Iraq War," *Survival*, Vol. 47, No. 2, Summer 2005, p. 13.

な成功体験を通じてさらに強まっていた³⁰。この戦争においてクウェートはイラク軍の駆逐後、特段の混乱なく平常状態に復帰したことから占領政策は不要であり、戦闘における勝利のみで戦争は終了したのである。こうしてその戦争方法の正当性が確信され、戦闘での勝利は一層重視されるようになった³¹。

しかし、国内の政権を打倒したイラクでは事情が異なった。戦闘のみで戦争は終わらず、米軍に求められた能力は、まさに避けてきた COIN であった。その結果、目的であるイラク復興のための治安回復を果たせず戦争は長期化、戦死者は増える一方であり、現場でも国内でも厭戦気分が高まりつつあった。米国としては本音では早く退きたいが、現状で退けば敗北を認めることとなり、ベトナムの再来になる。この状況を打開するために送られたのが、ペトレイアスである。

(2) ペトレイアスの COIN

ペトレイアスの着任後、イラクの治安は劇的に改善した。統計によれば、暴力事件の件数は 2006 年には週 1400 件を超えていたが、2007 年 11 月には週 600 件、2008 年半ばには週 300 件弱まで減少した。イラク人死者数は 2006 年下半期には月 3000 人を超えていたのが、2007 年 10 月には 950 人、2008 年 6 月には月 500 人以下へと減少した。米軍戦死者も、2006 年は月 60 人、サージ開始後の 2007 年 4-6 月には一時的に 103 人まで増加したが、同年 10-12 月には 25 人、2008 年には年間 20 人にまで減少している³²。

これに先立つ 2003 年、当時少将のペトレイアスは第 101 空挺師団を率いてイラク北部モスルの占領に当たり、COIN を成功させていた³³。彼は兵士の宿舎に「今日、君はイラク人の心を勝ち取るために何をした？」との標語を掲げ、民家に入る際には理由説明と感謝の言葉を欠かさぬよう命じた³⁴。また、小規模の資金貸付によって戦争で打撃を受けた商店の再開

³⁰ 福田、86 頁。「米国流の戦争方法 (the American Way of War)」については、Russell F. Weigley, *The American Way of War: A History of United States Military Strategy and Policy*, Indiana University Press, 1973. を参照。

³¹ 吉岡、97 頁。

³² Iraq Index, the Brookings Institution, <http://www.brookings.edu/wp-content/uploads/2017/11/index20051031.pdf>.

³³ Michael R. Gordon, "The Struggle for Iraq: Reconstruction," *The New York Times*, September 4, 2003.

³⁴ Rod Nordland, "Iraq's Repairman," *Newsweek*, July 5, 2004. p.21.

を支援し、ライフライン復旧等の民生の向上にも尽力した³⁵。さらに、下野したイラク軍人を警察に取り込み、住民による自治組織も発足させた³⁶。同時に地方選挙を実施して、有力者を通じての統治を試みた³⁷。このように、彼が行った占領統治の特徴は、ゲリラ掃討と並行して、民衆の支持を獲得するための民生復興支援を軍隊の活動の軸に位置づけたことであった³⁸。この師団の活動はイラク戦争初期の数少ない成功例として賞賛され、後の統治方式の原型となる。治安回復にあたり、武力の行使のみではなく、経済政策、現地警察の再建、選挙を通じた自治体制の確立など、民生分野へと軍の役割を拡大したという点で評価できる。

この後帰国した彼は、COINの新しいマニュアルを編集した。その骨子は次のとおりである³⁹。①対反乱作戦の核心は、ゲリラの殺害ではなく、民心の掌握である。まずゲリラと民衆を切り離すため、軍は民衆の中に入り、ゲリラからの報復から守ることによって協力を得る。②民心の掌握には軍事のみならず、経済を含む多面的なアプローチを要する。民衆の生活向上のために資金を拠出すべきであり、対ゲリラ戦においては「金は弾丸(Money is ammunition.)」となる⁴⁰。③交渉できる敵とは交渉し、敵を分断すべきである。対ゲリラ戦においては、純粋に軍事的な解決は存在せず、最終的には政治的な決着を目指すべきである。このマニュアルは、Web上で公開されてから2ヶ月後には200万ダウンロードを超える程の注目を集めた⁴¹。実体験をもとに、長らく軽視されてきたCOINを改めて体系化したという点でも、評価に値するものであった。

多国籍軍司令官として再びイラクに戻ったペトレイアスは、このマニュアルを直ちに実行に移した。彼は治安回復のため、まずスンニ派を味方につけた。フセイン政権の崩壊によって少数派のスンニ派優位の支配が終焉

³⁵ 高橋和夫「ペトレイアス将軍とアメリカの中東政策」『海外事情』第58巻11号、2010年11月、23頁。

³⁶ Joyce Battle & Thomas Blanton, "Top Secret Polo Step," *National Security Archive Electronic Briefing Book*, No.214, February 14, 2007.

³⁷ Linda Robinson, *Tell Me How This Ends*, Public Affairs, 2008, pp. 47-83.

³⁸ 矢野哲也「Commander's Emergency Response Program (CERP)に関する一考察」『国際公共政策研究』第14巻第1号、2009年9月、128-129頁。CERPとはイラク国民の福利と占領地域安定化のため、現地部隊指揮官に与えられた手段としての現金であり、占領統治政策の財源となった。

³⁹ The U.S. Army and Marine Corps, *Counterinsurgency Field Manual*, The University of Chicago Press, 2007, pp. 25-30.

⁴⁰ David H. Petraeus, "Learning Counterinsurgency: Observations from Soldiering in Iraq," *Military Review*, January-February 2006, pp. 3-4.

⁴¹ The U.S. Army and Marine Corps, *Counterinsurgency Field Manual*, University of Chicago Press, p.xxi.

し、多数派のシーア派による支配が始まっていたが、両派が混住するバグダッド等の中心都市では中央政府軍への反発が強く、アルカイダ等の外国人勢力も加わって混乱を深めていた⁴²。そこで彼は、交渉の通じない外国人勢力に対する攻撃を強めつつ、スンニ派の若者達に1人あたり数百ドルの月給を支払い、10万人以上を自警団として雇用した。これによってスンニ派は米軍への攻撃を止め、むしろ協力してゲリラと戦い始めた⁴³。ペトレイアスは、イラクにおけるシーア派とスンニ派の分裂・反目という問題に着目し、その解決策として、スンニ派に自らの治安維持を担当させたのである⁴⁴。結果、文字通り「金は弾丸」としてゲリラを効果的に駆逐し、治安を安定させる役割を果たした。このように、彼は軍事力を直接用いるのみならず、支配を失い不満を持っていた少数派の雇用によって、治安維持という役割をローカライズした。現地住民の自治体制確立への自覚を促し、米軍への好感度を高め、ゲリラを孤立させ、さらに自らの撤退準備を促進する、という一石何鳥もの効果を上げている点に、その政治的センスの非凡さがうかがえる。

さらに彼は、米兵のパトロール方式を変更した。それまで米軍は大基地から車両で出撃し、任務が終了するとすぐ帰還していたが、これでは民衆の協力は得難い。常に守られているという安心感を与えないかぎり、民衆はゲリラの報復を恐れるからである。またゴーグルで顔を隠し車両を乗り回すだけでは、民衆の目に米兵は血の通った人間に見えない⁴⁵。そこで彼は、各地域に交番のように小さな基地を設置し、そこから部隊を頻繁にパトロールに出すとともに、車両から降りて歩かせた。攻撃には弱くなるが、顔の見える距離を歩かせることで民衆との距離が縮まり、情報提供は得やすくなる。結果は先の統計のとおりであり、安全確保のためには、そこで暮らす情報通の民衆を味方につけることが最も効果的だった⁴⁶。軍隊は自己完結型の組織であり、そこが NGO 等民間団体にない強みでもあるのだが、ゲリラとの戦いでは民衆の協力が不可欠だったのだ。彼はあえて短期的なリスクを取ることによって、中長期的な安定を勝ち取ったのである。

このように、ペトレイアスは軍隊の戦後処理における役割を再考し、武力によるゲリラの掃討のみではなく、経済援助や軍の防護による民生の向

⁴² 高橋、24-26頁。

⁴³ Robinson, pp.217-270.

⁴⁴ 高橋、26頁。

⁴⁵ 同上、27頁。

⁴⁶ 同上、26-27頁。

上と安定によって統治を成功に導き、政府の期待に応えた。軍事力をゲリラの掃討という前面の主役として使うのみならず、民衆のサポーターとしての役割を積極的に負わせることによって、目的を達成したのである。これは、いかなる戦術や装備によって敵を効率よく殲滅するか、という純軍事的な発想に基づくものではない。非軍事的手段によって民生を安定させ、ゲリラと民衆を分断し孤立させる、という間接的アプローチを絡めたほうがより早く、犠牲を少なくして治安を回復できたという良い証左であり、軍人が自ら軍に新たな役割を与え、その有用性を実証したという点で、極めて意義深いものだといえる。

(3) 米軍への影響

イラクでの成功が評価されたペトレイアスは、2008年に中央軍司令官の要職に就き、アフガニスタンをも統括することとなった。同年、陸軍の基幹ドクトリン (*FM3-0*) も改訂され、そこでは「過去のドクトリンからの革命的離脱」として、現代の紛争では戦場での成功はもはや十分ではなく、最終的な勝利を得るためには、平和の基礎を打ち立てるための安定化作戦が必須とされた⁴⁷。また「金は弾丸」、「情報が成功の鍵」、「文化への理解は戦力を倍増する」といった、彼がイラクで得た数々の教訓も記された⁴⁸。

さらに10月には、新たなドクトリン *FM3-07*「安定化作戦」が公表され、安定化における政府全体での取り組み、国際機関やNGOとの連携に力点が置かれた。また、12月に策定された国防省指令3000.07は、COIN等の非正規戦を「伝統的戦争と同等の戦略的重要性を持つ」ものと位置づけ、非正規戦能力の強化や軍以外のアクターとの連携を命じている⁴⁹。加えて、同年運用が開始された米アフリカ軍司令部は、関係省庁間の連携向上のため、文民をより深く関与させた組織体系となった⁵⁰。これは今後予想される事態における民軍協力の重要性を、政府及び軍が深く認識したことの表れとも捉えられる⁵¹。米国流の戦争方法を追求してきた米軍は、ベ

⁴⁷ U.S. Army, *FM3-0: Operations*, February 2008, para. 3-2. 安定化作戦 (stability operations) は、紛争や災害で被害を受けた地域の復興と秩序回復を目的としており、COINを包含する概念である。

⁴⁸ Petraeus, "Learning Counterinsurgency," p. 3.

⁴⁹ 福田、94頁より再引用。

⁵⁰ Lauren Ploch, "Africa Command," *CRS Report for Congress*, July 2011, pp.8-9.

⁵¹ 吉岡、102頁。

トナム戦争から30年を経て、「暴力の管理」の新たな方法を模索し始めたかに見える⁵²。

ペトレイアスの成功は、「技術官僚に過ぎない」軍事指揮官が、軍事技術の通用せぬ問題を看破し、非軍事的手法を織り交ぜた解決策によって戦略達成を成し遂げたことを意味する。これは「暴力の管理」に専従していた軍人が、軍事力の直接使用のみでは達成困難な任務に直面して発揮した、ミリタリー・プロフェッショナルリズムの精華といえる。

3 英雄の条件

(1) 作戦術の適用—「暴力の管理」を超えて

なぜペトレイアスは成功し得たのか。米軍はベトナム戦争以降、作戦術という問題解決手法の採用によって、戦術行動の成果を戦略上の目標に寄与させる方法論を確立した。この作戦術は、米国においては全軍種共通で少佐以上の将校に必須の軍事素養とされ、指揮幕僚課程の主要教育事項とされている⁵³。しかし、なぜそれがイラクの安定化では通用しなかったのか。一方でペトレイアスが成功を収め得た要因は何処にあるのか。

作戦術では、所望の成果を得るために、まず「何が目標であり、望ましい終末状態であるか (Ends)」を確認し、「それらの達成には、どのような行動の連続が望ましいのか (Ways)」、そして「諸行動の連続のためにはどのような資源が必要であるのか (Means)」を設定する⁵⁴。これに従い、ペトレイアス以前と以後を比較すると、表1のとおりとなる。

ペトレイアス以前の NSVI 戦略と、彼が指揮したサージ戦略では、目指す Ends がほぼ同一だが、そこへ至る Ways と Means が大きく異なっている。

⁵² ペトレイアスの成功は COIN 推進派の影響力を高める一方、反対派の批判も呼び、その手法は必ずしも全面的な支持を得ているわけではない。COIN を巡る論争の主要な論点は、国防戦略の全体的な方向性、通常戦遂行能力への影響、ドクトリンの妥当性が挙げられる。福田、97 頁を参照。

⁵³ U.S. Joint Chiefs of Staff, *Officer Professional Military Education Policy (OPMEP)*, Department of Defense, 2009, Appendix A-A-3 to A-A-4. 作戦術については詳述する紙面が無いが、総論すれば「所望の目的を達成するために、それを見失うことなく最善の方法と手段を生み出すための考え方を、軍事において表現したことば」と概説できる。

⁵⁴ U.S. Joint Chiefs of Staff, *JP3-0*, 2017, p. II-4.

【表1】作戦術の観点から見た NSVI 戦略とサージ戦略の比較

	NSVI 戦略	サージ戦略
Ends	対反乱勢力の駆逐によるイラクの安定と平和	
Ways	掃討、確保、構築による政治・治安・経済の3分野の統合推進	民衆の保護、民生の向上を優先したゲリラと民衆の切り離し
Means	強固な基地、精密攻撃能力、俊敏性、ISR能力	兵力、金、自警団、PRT

(National Strategy for Victory in Iraq, Fact Sheet: The New Way Forward in Iraq, Multi-National Force-Iraq Counterinsurgency Guidance をもとに筆者作成)

NSVI では、政治・治安・経済の3分野の密接な関連から、統合して戦後処理を進めることとされていた⁵⁵。それを端的に表した方針が「掃討、確保、構築」であったことは既に述べたが、国務省のこの方針に国防省は反発した。敵軍を撃破した以上、米軍は速やかに撤退すべきであり、掃討や治安維持はイラク治安部隊の任務だと考えていたからである⁵⁶。また前線の兵士にも、戦闘後の駐留の意義を理解していない者も多かった⁵⁷。さらに、米軍の迅速な作戦行動によるイラク軍の撃破は、安定化の段階では裏目に出た。短期間で政権が打倒されたため、治安維持のための人員と準備が不足したうえに、都市部のインフラ被害も最小限だったため、潜在的な反乱分子が無傷で潜伏できたのである。その結果生まれた無数のゲリラに対し、米軍は強みである精密攻撃能力、俊敏性、高度なISR能力によって掃討を試みたが、イラク軍の迅速な撃破に有効性を発揮したこれらのMeansも、治安維持においては二義的な重要性しか持たず、「掃討」はできて「確保」が達成できなかったのである⁵⁸。このように、NSVIにおけるMeansは実効性を欠いており、Waysも掃討という戦術的成果が目的達成に結びつかなかった。すなわちEndsに繋がるWaysとMeansの導出が適切でなかった、ということになる。

⁵⁵ NSC, *National Strategy for Victory in Iraq*, p. 9.

⁵⁶ Bob Woodward, *State of Denial*, Simon & Schuster, 2006, pp. 418-422.

⁵⁷ 福田、88頁。

⁵⁸ 同上、88-89頁。

これに対し、サージでは治安回復を最優先課題としていた⁵⁹。まずはゲリラ孤立化のため民心を掌握する必要がある、そのための **Ways** として治安回復を最優先とした。治安維持のためにはゲリラから民衆を守らねばならず、したがって **Means** として必要となるのは、最新装備よりも常続的なパトロールのためのマンパワーと、民生向上のための金銭であった。そして主要都市部で自警団を組織させることによって、戦闘に走りやすい若者不満分子を抑えるとともに、雇用を創出して民生をより安定させ、それを徐々に地方に押し広げて自治体制を確立させていったのである⁶⁰。

加えて、民軍間の協力という分野でも強化が行われた。NSVI では **PRT (Provincial Reconstruction Team: 州政府統治能力向上による地域復興チーム)** に軍から人員を派遣していたものの、統一された行動計画やドクトリンはなく、州政府レベルへの関与にとどまり、十分に機能していなかった⁶¹。これに対し、サージでは民軍の緊密な連携を積極的に図ることを明記し、軍の一部として活動する 14 個の民軍共同チームを新たに追加した⁶²。PRT が軍の保護や輸送支援を得ることで、村レベルまで細やかで効率的な活動を実施することができ、地方自治体の復興に大きく貢献したのである⁶³。これは民軍の統合的な協力関係が、COIN にとって不可欠であることを示すものであった。

このように、ペトレイアスのイラクでの成功は、米軍の確立した問題解決手法である作戦術の適用において、**Ends** に見合った適切な **Ways** と **Means** を導出できた点に負うところが大きい。短期的な軍事的合理性にとらわれることなく、長期的な展望に立って、「暴力の管理」の範疇を超える非軍事的手段を織り交ぜた多様な解決法を導き出したことが、戦略達成につながったのである。

⁵⁹ Office of Press Secretary, *Fact Sheet: The New Way Forward in Iraq*, White House, <http://georgebwbush-whitehouse.archives.gov/news/releases/2007/01/20070110-3.html>.

⁶⁰ Petraeus, "Learning Counterinsurgency," pp. 1-10.

⁶¹ Roberto Perito, "Provincial Reconstruction Teams in Iraq," *United States Institute of Peace Special Report 185*, March 2007, p. 3.

⁶² Commanding General MNF(I), *Multi-National Force- Iraq Counterinsurgency Guidance*, June 2007, http://www.airforce.forces.gc.ca/CFAWC/Contemporary_Studies/2007/2007-06-06_MNF-I_COIN_Guidance-Summer_2007_v7_e.asp.

⁶³ Donna Miles, "Bush Praises Reconstruction Teams for Building on Iraqi Progress," *American Forces Press Service*, January 8, 2008.

(2) ペトレイアスの問題意識

では、いかにしてペトレイアスはかような発想を持ち得たのか。そもそも彼は、早くから米軍の COIN 軽視に対して疑問を投げかけていた。1986年に発表した論文では、米軍はベトナム戦争から「COIN を避けるべきという教訓を得ながら、今後予期される紛争では COIN に重点を置かなければならないというジレンマに置かれている」と指摘し、「国際情勢を鑑みれば、むしろ積極的に COIN に備えた軍隊や装備、ドクトリンを備えるべき」と主張した⁶⁴。また翌年の博士学位論文では「米軍が将来的に遂行する公算の高い作戦は COIN であり、ワインバーガー・ドクトリンのような戦争と平和の単純な二分法は非現実的」と述べていた⁶⁵。果たしてその予見どおり、米軍は非正規紛争へと関与していく。彼はこの問題意識によって、再び COIN が必要とされたイラクにおいて、自らの持論を実証し得たのである。

COIN 自体は決して新しい概念ではない。COIN の古典として、1964年に著された仏軍人ガルーラ (David Galula) の『対反乱作戦』の要旨は、①COIN では民衆に焦点を当てよ ②勝利は反乱勢力の粉砕ではなく、民衆からの永続的な孤立によって得られる ③報復攻撃の恐怖から民衆を守る意志と能力とを示せ、というものである⁶⁶。これは毛沢東戦略の分析と、彼自身のアルジェリア戦争での体験をもとに作られたものであるが、これはまさに彼がイラクで実践した COIN の歴史的先例といえる⁶⁷。ペトレイアスは 2006 年に新たな COIN ドクトリン *FM3-24* 「対反乱」を完成させ、政治目標に対する軍事の従属、反乱勢力と民衆の分離、軍隊以外のアクターとの協力、非戦闘任務の重要性等を強調しているが、この思想は、イラクで実践した民生重視の *Ways* と、民間団体との協力や非軍事的手段を重視した *Means* に、如実に表れている⁶⁸。このように彼の功績は、古典的 COIN 理論の現代に通ずる普遍性を、実績によって示したことにある。さ

⁶⁴ Petraeus, "Lessons of History and Lessons of Vietnam," *Parameters*, Vol. 40, No. 4, January 2010, p. 56. (再掲。初出 1986)

⁶⁵ Petraeus, "The American military and the lessons of Vietnam: a study of military influence and the use of force in the post-Vietnam era," *Ph. D. diss.*, Princeton University, 1987, p. 312.

⁶⁶ David Galula, *Counterinsurgency Warfare: Theory and Practice*, Frederick A. Praeger, 1964, pp. 71-135.

⁶⁷ 福田、79 頁。

⁶⁸ 同上、91-92 頁。

らにその思想は、反乱側と対反乱側の両者の視点を包括しているという点で、古典理論を発展させ重要度を高めたものと評価されている⁶⁹。

以上のように、先人に学んだ彼はベトナム戦争に対する米軍の姿勢を批判し、COINの必要性を予見して論文で説いたが、その主張は当時の米軍には受け入れられなかった。しかし、その後米国流の戦争方法がもてはやされる中でもその問題意識を忘れることはなく、それはイラク戦争という機会を得て、ついに日の目を見た。自らの論文でCOINの必要性を説いてから20年の歳月を経て、彼は自らの提言を実現したのである。

(3) 21世紀のミリタリー・プロフェッション

ペトレイアスがその実績を通じて、現代に問うものとは何か。まず彼の実績が示すものは、変化に迅速に対応する能力の必要性である。彼は策定したドクトリンにおいて、COINが通常の戦闘と大きく異なる点をパラドックスとして強調しており、そこには「COINでは今週通用した戦術が、来週には通用するとは限らない」という一節がある⁷⁰。今日の反乱勢力は広範囲の通信ネットワークを有しており、効果的な戦術への対応策も素早く共有される。したがって有効な戦術ほど、時代遅れになるのも早くなる。彼はCOINを成功させたが、万能の解決策(silver bullet)は存在せず、常に新たな手法を開発する不断の努力が必要、と戒めていたのである⁷¹。このように、情報共有のスピードが恐ろしく高速化した現代においては、戦術の陳腐化が早まり、常に新たな脅威が降りかかる。米軍ではこうした予測困難な脅威を素早く察知し、状況に適応する能力を「作戦上の適応性(operational adaptability)」として、軍のリーダーと部隊が示す資質の中核、21世紀の軍人の新しい規範として位置づけている⁷²。コーンTRADOC司令官は、将来の脅威の予測が困難である以上、予測を間違える可能性をひとつの前提として、「間違いに気づいて素早く軌道修正すること、変化の兆候を見逃さず、作戦のフェーズ間の移行を迅速に行う能力を持つこと」が求められ、そのために「方針変更の物理的・心理的な備えが出来

⁶⁹ Elinor C. Sloan, *Modern Military Strategy: An Introduction*, Routledge, 2016, p. 96.

⁷⁰ U.S. Army and Marine Corps, *FM3-24 / MCWP 3-33.5: Counterinsurgency*, Headquarters Department of the Army, 2006, pp. 1-26 to 27.

⁷¹ *Ibid.*, pp. 1-28.

⁷² Michael A. Vane, "New Norms for the 21st Century Soldier," *Military Review*, Vol. 91, No. 4, July/August, 2011, pp. 16-17.

ている必要がある」と指摘する⁷³。またベトナム戦争に従軍し、NATO 最高司令官を務めたギャルビン大將は「士官の成功は、戦争の変化しつつある環境を理解する能力にこそかかっている」と説いている⁷⁴。これらは変化する戦略環境において、現代の軍人に求められる柔軟性と進取の精神を、端的に示したものと見える。

次に、彼は目的達成への過程において、Ends に至る適切な Ways と Means を導出する力の重要性を示した。戦略目的が同一であっても、そこへ繋がる作戦行動と必要なリソースを適切に設定することができなければ、作戦術は有効に機能しない。NSVI では政治、治安、経済の3分野の統合推進を Ways として掲げてはいたが、優先順位は特に示されていなかった。一方サージにおいて、彼は明確に治安最優先の方針を打ち出した。それは彼が、古典的 COIN 理論から「反乱勢力と民衆の切り離し」こそが、勝利の要件であることを掘りだしたからだと考えられる。情報化時代は確かに COIN に新たな面を付け加えたが、その中核である勝利の要件は実質的に全く変化していなかった⁷⁵。つまり彼は、変化に対応する一方で、時代が変わっても変わることのない問題の本質を見失わず、それが適切な手段の導出につながったといえる。グレイは「どこに注力するのが最も有効かを特定」するために、「複合的な相互依存関係や影響力をもつ多様な要因を考慮し、システム全体を見渡す」能力の重要性を説いている⁷⁶。この物事の本質を見抜く知性、時代の流れに左右されず普遍的なものを見抜く眼こそ、多様な軍務において問題解決を求められる軍人に必要な資質のひとつであろう。

また同時に、解へのアプローチを明確なビジョンをもって順序よく組み立て、実行する能力の必要性をも、両戦略の差は示している。「政治、治安、経済の統合的な推進」では不十分であり、まず最優先で治安を回復させることが必要だった。ひとたび治安が回復すれば、民衆はその安寧を再び失うことを恐れる。ただゲリラを殺して基地に去っていくだけの軍隊は、民衆にとって戦いを撒き散らす厄介者でしかない。だが、パトロールによって治安維持の役割を担ってくれれば、軍隊は彼らの生活を守る味方になる。経済援助によって生活が向上すればなおのことだ。そうなれば、もはや民衆とゲリラの利害は一致しなくなり、今度はゲリラが平穏を乱す、憎むべ

⁷³ Robert W. Cone, "Shaping the Army of 2020," *Army*, Vol. 61, No. 10, October 2011, p. 72.

⁷⁴ John R. Galvin, "Uncomfortable Wars: Toward a New Paradigm," *Parameters*, Vol. 16, No. 4, Winter 1986, p. 7.

⁷⁵ Sloan, p. 97.

⁷⁶ Colin S. Gray, *Modern Strategy*, Oxford University Press, 1999, pp. 23-43.

き敵となる。こうしてゲリラの依って立つ基盤そのものを失わせ、平和と安定とを達成する。このように、1つのアクションが何にどのような影響をもたらし、いかなる状態が生起するか。取り得る選択肢の効果を最大にするためには、まず何を優先すべきなのか。これらを一貫したロジックに基づいて、段階的に具体化する能力の必要性がここからは読み取れる。米陸軍戦略大学校教授のヤーガーは、「各要素が過去、現在、未来においてお互いにどのような影響を及ぼし合うのかに着目し、それらの相互作用がいかに全体を構成するのかを理解しようとする包括的思考」の重要性を説き、そのためには「今の戦略環境のなかで他にどのような事態が生じているか、またその選択が自身のレベルやその上下に位置するレベルにいかなる一次的、二次的、三次的影響を及ぼし得るか、という点に関する幅広い知識」が必要だと主張する⁷⁷。作戦術に基づくこの論理的思考力は、作戦・戦略レベルにおいて文民と共同するための有効な能力、すなわち軍人のプロフェッションとなるであろう。

しかしながら、フリードマンは「これほどまでに物事を把握する特異な能力をもった人間が存在し得るか」と疑問を呈し、それは「戦略の達人という神話」を追求することに等しいと指摘する⁷⁸。なぜなら、個人のレベルにおいて蓄積し、消化し、活かすことのできる知識の量には限りがあり、広範な軍事以外の領域、とりわけ政治の領域での活動には「複雑で動的な状況の全体を把握するという不可能な全知や、幸運や敵の無能さに頼らずに、遠くの目標に向けて信頼性と持続性のある道りを築く能力が必要」だからである⁷⁹。ペトレイアスは確かに実績を残した。だが、その実績は必ずしも、彼が上記のような能力を全て備えていたことを証明するものではない。では、その成功例から帰納的に引き出せる軍人の能力は一体何か。

彼が行ったドクトリン改訂には、一風変わった点があった。ドクトリンは軍で編纂を行うのが常だが、彼はその作業にCIA職員、研究者、ジャーナリスト、人権擁護活動家等を招待した。さらに多国籍軍司令官として、COINに通じた軍人を国内外から集めるのみならず、アドバイザーとしてアラブ系平和活動家まで用いた⁸⁰。彼はイラクの平和と安定という戦略目

⁷⁷ Harry Yarger, *Strategic Theory for the 21st Century: The Little Book on Big Strategy*, U.S. Army War College, Strategic Studies Institute, 2006, pp. 36-75.

⁷⁸ ローレンス・フリードマン『戦略の世界史 上』貫井佳子訳、日本経済新聞出版社、2018年、360、366頁。

⁷⁹ 同上、367頁。

⁸⁰ Thomas E Ricks, *The Gamble: General David Petraeus and the American Military Adventure in Iraq 2006-2008*, Penguin Press, 2009, pp. 24-29, 133-146.

標達成への具体的なプロセス構築のため、実に多様な人材を集めたのである。この点にこそ、彼の非凡さが現れているのではない。

ここに見出せるのは、問題解決に必要な要素に当たりをつけ、解に向かって他者の努力を結集し、指向させる力の重要性である。全てを独力で解決できる「戦略の達人」である必要はない。指揮官は、解決の糸口となる核心を見抜いて方針を示したならば、後は最適な手段を知っているであろう、それぞれの専門家たちを集めて所要の情報を引き出せばよい。あらゆる問題の解決フローを独力で組み立てる必要はなく、自分が迷わず決断できるように、必要な知を引き出すための強力なベクトルを示す力こそが重要なのである。シンプソンは「大使、軍の中隊指揮官、援助専門家、政治家等、権限や機能のあらゆるレベルにわたりチームを結束させる」ことの重要性を説いている⁸¹。またフリードマンは「戦略構築とは、現状で最も重要な緊急課題への対処方法について合意を形成し、状況を著しく改善させる手段を講じるために、多種多様な関係者を協働させることを意味する」と指摘する⁸²。ペトレイアスは、目的を達成するために必要であろう人材を選定して結集し、実務に当たる者たちをマニュアルの配布や自らの指導によって叱咤激励し、問題解決に向かって強力に牽引した。多様化する任務のなかで容赦なく実績を求められる、現代の軍人に必要不可欠な資質を実証してみせたのである。

もうひとつ見逃してはならない点が、自らの知を磨く姿勢である。ペトレイアスが自己の問題意識を実現するまでの過程に着目しよう。彼がCOINの重要性を説いた論文は、将来の戦争様相を正しく予見するものであったが、その当時は広く賛同を得られなかった。実践という試練を経ないアイデアは、たとえそれがいかに優れたものであったとしても、理解されることは難しい。まして、それが主流派の意見に反するものであれば尚更である。従軍経験もない1少佐の論文では、世は動かなかった。だが歳月を経て、彼は指揮官としてその問題意識を実践に移し、その成功と教訓をもとにドクトリンを改訂し、米軍を変革した。ここから言えるのは、発想には実践という試練が必要だということであり、それを試し磨く勇気を持つ者こそが、物事を変えることができるということである。そして部下の身命を預かる軍人にとって、その試練は一際重い意味を持つ。そこで彼は、自ら抱いた問題意識を論文という形で発表し、知的な確認を取った。

⁸¹ Emile Simpson, *War from the Ground Up: Twenty-First-Century Combat as Politics*, Hurst & Co., 2012, p. 233.

⁸² フリードマン、366頁。

それによってナーグル (John A. Nagl) のような知己を得ると同時に、ジェンタイル (Gian P. Gentile) のような反対派も現れ、活発な論争と膨大な知的活動を生み出した⁸³。浮かんだアイデアを、自分の中で温めておくだけでは十分ではない。それを論文という形で発表し、磨き上げ、実践することがフリードマンのいう「状況を著しく改善させる手段を講じるために、多種多様な関係者を協働させる」こと、つまり広く社会を巻き込んで問題解決へと指向させることにも繋がるのである。この知的態度こそが、兵士の命という重いチップを背負う軍人のあるべき姿勢といえるのではないだろうか。

以上を要約すれば、現代の軍人には①変化に気づき対応する柔軟な適応性、②物事の普遍的な本質を見抜く知性、③見抜いた本質から解決に至るプロセスを具体化する能力が求められる。また同時に、個の知の限界を認識し、④知を結集して解に指向させる力、⑤持論を広く世に問う知的態度をも備えねばならない、と結論づけられる。このプロフェッショナルリズムこそ、安全保障という予見が難しく失敗の許されぬ分野を生業とする者として、また変化の加速する戦略環境に身を置き、部下の身命を預かる軍人として、常に追求すべき姿勢といえよう。

おわりに

以上の議論から、本稿は次のことを明らかにした。第一に、軍隊をとりまく環境は大きく変化しており、多様化し感性を増す任務のなかで、軍人のプロフェッショナルリズムは鼎の軽重を問われている。第二に、イラク戦争が生んだ英雄ペトレイアスの事例は、そのような変化のなかで軍人が自らのプロフェッションを発揮し、軍事及び非軍事的アプローチを巧みに織り交ぜることによって、戦略目的の達成に貢献し得た一例であることを示した。第三に、その成功の要因は、戦術上の成果を戦略達成へと導くための作戦術という手法と、その適用において適切な手段とリソースを導き出し得たことにあった。そしてそのために必要な能力として、予測困難な脅威に素早く対応するための適応性、事態の普遍的な本質を見抜く知性、解決に至るプロセスを具体化する能力、知を結集し解に向かって強力に指向させる力、持論を広く世に問う知的態度があることを指摘した。

⁸³ 新福祐一「湾岸戦争後のアメリカ陸軍における対反乱作戦研究の一潮流－1990年代のジョン・A・ナーグルを中心に－」『平成29年度戦争史研究国際フォーラム報告書』防衛研究所、2018年3月、92-97頁。

結論として、ペトレイアスの事例分析から、仮説はある程度正しいが不十分であったといえる。軍人が軍事を超えた見識を備えていることで、導出される解の幅が広がることは明らかとなった。だが同時に、個の知に限りがある以上、自らの持たぬ知を備えた人材を結集させ、問題解決に向かって指向させる力も必要となる。そして、その手段としては直接的なリーダーシップの発揮だけではなく、自らの発想をパブリッシュして世に問う知的態度も含まれる。むろん、たとえ全てを見通すことが無理だとしても、可能な限りあらゆる事態を想定しようとする努力を怠ってよい理由にはならぬ。兵士たちが切迫した不測の事態に直面したときに見るのは、指揮官の顔である。だからこそ、戦場で他に頼む者が無い事態に備えて、士官たるものは平素から「神話」に近づこうとする研鑽を怠ってはならず、脅威に対する適応性を磨いておかねばならない。

なお、最新の米陸軍ドクトリンでは、中国やロシアの脅威を背景として、再び大規模戦闘への回帰傾向がみられる⁸⁴。安定化作戦に倦んでいた陸軍の一部からは、これを歓迎する向きも多い。これは米軍の退歩を意味するものではなく、国際情勢に応じて、その時々で求められる軍のあり方が変化するのは当然のことである。ペトレイアスとそのドクトリンの歴史的評価については、今後も賛否両論があろう。しかし COIN を忘れたときにどうなるか。ベトナム、イラクの再来となるだけである。国際情勢の変化に応じたドクトリンや装備を整えることは必要不可欠であり、国家の大事である。だが、その変更には相応の予算と時間を要し、いつ何時でも任務達成に最適な環境が、軍人に用意されているわけではない。そのような時にこそ、本稿で導出したような能力の発揮が求められるのであり、それが時代の流れに左右されぬ軍人の職業的専門性、揺り戻しに耐えるミリタリー・プロフェッションと呼べるのではないだろうか。

イラクでの米軍の失敗は、ペトレイアスという英雄を生んだ。だが英雄というものは、失敗したときこそ必要とされるものだ。それは英雄の偉業が、手痛い失敗を忘れさせてくれるからである。であるならば、英雄など生まれぬに越したことはない。彼のような問題解決のための知性を備えた軍人がありふれ、淡々と任務をこなし、世に名も出ないことが一番ではないか。起り得る戦に備えて訓練に励み、装備を整え、表に出ぬその備えによって、戦を未然に防止する。流れる血の量を減らすには政治と外交が必要であるが、それをひっそりと陰で支える力としてこそ、軍隊の存在意

⁸⁴ Mike Lundy & Rich Creed, "The Return of U.S. Army Field Manual 3-0, Operations," *Military Review*, Vol. 97, No. 6, November-December 2017, p. 21.

義がある。己が力を使わぬために、黙々と剣を磨き続ける。それこそが民主主義国家の軍隊というものの二律背反的な存在意義であり、軍人の本分である、と筆者は信じるものである。